

東三河 地域研究

2025年7月29日発行

編集・発行：

公益社団法人東三河地域研究センター

住所／豊橋市駅前大通三丁目53番地

太陽生命豊橋ビル2階

TEL／0532-21-6647

FAX／0532-57-3780

通巻188号 2025. 7

2024年度 東三河地域問題セミナー 第2回公開講座

講演：『南信州の観光資源の活かし方と観光 DMO の取組み』

株式会社南信州観光公社 代表取締役社長

高橋 充 氏 2～7



2024 年度 東三河地域問題セミナー 第 2 回公開講座

講演：『南信州の観光資源の活かし方と観光 DMO の取組み』

株式会社南信州観光公社 代表取締役社長 高橋 充 氏

2025 年 7 月 2 日（水）14 時～16 時 豊橋商工会議所 4 階 406 会議室にて講演を行った。

講演

『南信州の観光資源の活かし方と観光 DMO の取組み』

株式会社南信州観光公社 代表取締役社長

高橋 充 氏

1. はじめに

南信州という目玉であったり特筆すべきものというのはなんだろうと思ったときに、パッと思い浮かばない方も多いと思う。長野県全体あるいは信州の括りでいえば、有名な上高地だとか諏訪の御柱や花火大会、あるいは軽井沢やアルプス、松本城などそういったシンボリックなものはたくさん思い浮かぶと思うが、南信州あるいは飯田市周辺というように捉えたときにどういう風な見方をされるのかと感じ、地域の特徴を示す写真をスライドにまとめた。この中で、天龍峡は比較的有名だと思うが、それでも認知度の統計を取ると数パーセント程度だと思う。その他、伊那谷の棚田や、しらびそ高原の星空、水引や農家民泊の写真である。このように、南信州地域の観光というのは、1 つの大きな目玉があってそれを軸に展開する形ではなく、様々な分野のものを各地に配して、それを南信



州観光公社という組織体が全体を取りまとめる形で、効果的な情報発信や地域のコーディネートに取り組んできている。

2. 南信州観光公社の成り立ちと現在

南信州観光公社の活動は、今から約 30 年前、1995 年に飯田市商業観光課が始めた「体験教育旅行誘致事業」に端を発する。当時の飯田市は、天龍峡の舟下りや飯田水引といった観光資源は有していたものの、上高地や諏訪の花火大会、軽井沢など長野県内の他の有名観光地と比べて全国的な知名度が低く、名古屋圏からも 2 時間程度でアクセスできることから、観光客の多くは日帰りの「通過型」であった。そこで、飯田市は、観光客に地域でより多くの経済活動を促し地域振興に繋げるため、宿泊を伴う観光誘致を模索していた。

この課題に対し、当時の国の教育方針の転換が好機となった。社会の核家族化や地域コミュニティの崩壊が進む中、文部科学省は「生きる力」の育成を掲げ、「体験的な行事」や「総合的な学習」を重視する学習指導要領の改訂を進めていた。飯田市はこの動きを捉え、外部コンサルタントの助言を受けて、地域の住民と行政が一体となり、質の高い体験プログラムを提供することで、修学旅行誘致が可能であるとの方針を打ち出した。

1996 年に体験教育旅行の受け入れが始まったが、その成果は顕著であり、わずか 5 年間で、それまで 0 校だった利用団体数が 70 校にまで増加した。事業の拡大とともに、受け入れ先の確保と、事業を継続的に専門性を持って担う窓口組織の必要性が高まり、2001 年 1 月に株式会社

南信州観光公社が設立された。設立当初は飯田市と4つの村、地元企業・団体10社が出資し、2004年には当時の飯田下伊那地域の全18市町村が、その後は上伊那郡の飯島町と中川村も加わり、広域的な連携体制が強化された。

南信州観光公社は設立以来、「独立採算」を基本とし、最低限の運営費用を自力で賄いながら、地域全体への経済効果を最大化することを目指してきた。しかし、2018年頃から国が「日本版DMO」の推進を始めると、南信州観光公社は飯田市のDMOとして位置づけられ、大きな転換期を迎える。長年の歴史を持つ飯田観光協会が2018年度末に解散し、その事業や観光予算の大部分が南信州観光公社に引き継がれることとなった。さらに、リニア中央新幹線の開業を見据えた地域振興策として、南信州広域連合からも予算が交付されることとなり、2019年度からは「旅行事業部」と「地域振興事業部」の二つの部署を擁する体制で、地域魅力の発掘・商品化と旅行マーケットの連携を強化している。

3. 「ほんもの体験」が目指すもの

南信州観光公社の活動の核となるのは、「ほんもの体験」という哲学である。この地域には、上高地や軽井沢のような「パッと見て分かりやすい」観光地としてのシンボルは少ないものの、豊かな自然、多様な産業、人々の暮らしや文化、歴史といった、人を惹きつける魅力が豊富に存在する。

「ほんもの体験」では、地域に暮らす人々自身がインストラクターや受け入れ農家となり、彼らが普段から行っている生活や仕事の営みをそのまま、訪れる学生や観光客に体験させる。例えば、リンゴ栽培の摘果作業を通じて、生産者の苦労や努力を肌で感じたり、棚田での田植え体験を通じて、地域の保全活動の意義を学んだりする。このような体験は、単なる知識の習得にとどまらず、地域の人々との交流を通じて「学び」「発見」「感動」という副産物を生み出

し、それは、瞬間的な驚きではなく、心に染み入るまでの時間と人との交流を通じて得られる、深い感動を目指すものである。

具体的な「ほんもの体験」の例として、以下のような多様なプログラムが提供されている。

- ・天竜川をチームワークで下るラフティング
- ・地元のお母さんに教わる五平餅作り
- ・少人数制の農家民泊
- ・地区で保存されている棚田での田植え・稲刈り体験
- ・リンゴ作りの苦労を知る摘果体験
- ・職人の魂を感じる草木染め体験

これらの活動を通して、参加者が「主人公」となり、地域の持続的な取り組みや工夫を理解し、自身の新たな発想へと繋げることを目的としている。



地区で保存している棚田での田植 りんご作りの苦労を知る摘果体験
職人の魂を感じる草木染め体験 地元のお母さんに習う五平餅作り

4. SDGs プログラムへの応用とコロナ禍での対応

2020年からのコロナ禍は、観光業界に甚大な被害をもたらし、教育旅行事業が収入の大部分を占めていた南信州観光公社も大きな影響を受けた。しかし、観光公社はこの危機を逆手に取り、積極的にチャンスに変える戦略を打ち出した。当時の保健所長と連携し、国が「新しい生活様式」を発表するよりも早く、感染症対策に関する独自のガイドラインを作成し、「南信州は修学旅行を受け入れます」という明確なメッ

セージを全国の旅行会社に発信したのである。この迅速な対応と長年の信頼関係が功を奏し、コロナ禍の初年度にも関わらず、前年を上回る90校以上の学校を受け入れることに成功した。

特にこの時期に脚光を浴びたのが、SDGs プログラムへの応用である。2020年の学習指導要領改訂で重視された「主体的・対話的で深い学び」の考え方がSDGsの理念と強く結びつくことに着目し、南信州観光公社は以前からSDGsの視点を取り入れたプログラム開発を進めていた。これらのプログラムは、棚田の保存活動、循環農業、飯田水引のような伝統工芸の継承、地域農業法人の取組みなど、地域がこれまで続けてきた活動をSDGsの文脈で再定義し、提供したものである。例えば、水引職人から歴史や革新について話を聞いたり、地元の和菓子店を巡りながら地域資源の活用を考えたりといったテーマが設定された。

このSDGsプログラムの提供は、多くの学校が旅行先を南信州に変更する決定打となり、約30校がSDGsプログラムを求めて来訪した。これは、単なる受け入れ態勢だけでなく、教育的な価値を提供することで、危機的状況下での集客に大きく貢献した事例となった。

テーマ1 棚田の保存活動に地域づくりの原点を見る 進 行 ① 棚田保全の課題や地域としての取組の経緯の説明及び質疑応答 ② 棚田視察／OPで田植え、稲刈体験 ③ 棚田を活かした新しい取り組みの紹介と質疑応答 ④ グループワークと発表と講評 ねらい 継続的な地域の取組のための工夫を知り、自身の感覚による新たな着想につなげる。	
テーマa 時代に合わせて工夫を重ねてきた飯田水引の真髄を知る 進 行 ① 水引職人から飯田水引の歴史とその背景の説明及び質疑応答 ② 飯田の取組と将来に向けた構想について紹介と質疑応答／OPで水引体験 ③ グループワークと発表と講評 ねらい 300年を超える歴史の積み重ねがありながらも、社会の変化に対応した新たな工夫により、次代を切り拓く意図と行動に触れ、自身の感覚による発想を期待。	
テーマb 和菓子処飯田で保護を続ける名店／地元の特産品を活かした観光を考える 進 行 ① 案内人と共に飯田のまちなかに歩く ② 和菓子店の逸品を食す(持帰りとなる場合あり) ③ グループワークと発表と講評 ねらい 地域の歴史や特産品を合わせた旅の素材の活用について知り、応用などを自由に発想	

5. 一般ツアーへの応用と「知的好奇心の旅」

教育旅行で培われた「ほんものの体験」のノウハウは、一般の観光客向けのツアーにも広く応用されている。南信州観光公社は、「人の興味は十人十色ではなく“一人十色”」という考え方を基本とし、食、文化、伝統芸能、自然、歴史、人々の暮らしなど、様々な切り口からテーマを設定した旅を企画している。

特に重視しているのは、地域の隠れた魅力や熟達した技術・経験を深く掘り下げる「知的好奇心の旅」である。これは、単なる消費体験にとどまらず、参加者の知的好奇心を刺激し、心に深く刻まれる感動を提供することを目指している。例えば、「桜守の旅」では、標高差によって約1ヶ月間楽しめる飯田・南信州の一本桜の多さに着目し、地元の桜案内人が旬の名桜を巡るミステリーツアーを企画した。また、「南信州山城物語」では、160カ所以上存在する山城や砦の歴史的背景を地元の歴史研究家が解説することで、歴史愛好家を惹きつけている。他にも、「和菓子探訪の旅」や「JR飯田線秘境駅ウォーキング」など、地域の資源と人々の案内を組み合わせたユニークな企画が行われている。

これらのツアーでは、地域に暮らす人々が案内役となり、知られざる事実や深い背景を解説することで、参加者の感動や理解を深めている。

南信州観光公社は、これらのツアーを「南信州こだわりの旅」として自社で企画し、年間30～40本実施している。これは、新たな旅行商品の開発と市場調査を兼ねた取組みであり、DMOとしての側面と旅行会社としての側面を両立させている。

「桜守の旅」

① 一本桜の名桜の多さと咲く期間の長さに着目。
② 桜案内人が旬の名桜を案内するミステリーツアーが可能。
③ マイクロバスでなければ行けない山間に咲き誇る一本桜、といった視点での企画も有効。

「南信州山城物語」

① 南信州には160カ所以上の山城、砦など、中には中世にまで遡る遺構があるだけでなく、地方豪族と戦国大名とのつながりといった歴史浪漫を盛り立てられる物語がある。
② 優れた地元史研究家があり、現地で解説することが大きな魅力となる。

他にも「和菓子探訪の旅」「JR飯田線秘境駅ウォーキング」といった地域にある資源と地元の人々の案内を組み合わせた企画がある。





「南信州こだわりの旅」自社募集ツアー

～歴史、食文化、伝統芸能、自然、人、体験等様々な切り口から旅を企画～








6. インバウンド誘致への挑戦

当初、南信州観光公社は、体験型観光における言語の壁から、インバウンド（訪日外国人観光客）の受け入れには消極的であった。しかし、2012年に飯田市からガーナの高校生21名の受け入れを依頼されたことをきっかけに、その考えは一変する。15年以上にわたり国内の修学旅行生を受け入れてきた農家の人々は、言葉が通じなくとも、人間関係を構築する高い専門能力を有しており、ガーナの生徒たちとすぐに打ち解けることができた。この経験から、「言葉の壁を越えた交流の心が通じる」という確信を得て、インバウンド誘致に積極的に取り組み始めることになる。

その後、農林水産省の事業を通じたアジア・欧米からの受け入れや、中国、韓国、台湾の政府系・文化交流組織との連携を深めることで、インバウンドの受け入れ数は飛躍的に増加した。2017年にはアメリカやイギリスのビジネススクールから1,040名、2019年には年間2,000名の訪日外国人を受け入れるまでに成長した。コロナ禍で一時的に途絶えたものの、2023年には700名が再訪し、2025年には1,000名以上の受け入れを目指している。

インバウンドの利用者からは、「地元の文化を教えてくれた素晴らしい経験」「地元の人との対話や日本の生活を見る機会を与えてくれた」「飯田旅行のハイライトであり、本当の経験であって観光客ではない体験だった」といった、地域の人々との交流を通じた「本物の文化体験」への高い評価が寄せられている。これは、南信州の観光が、いわゆる「インスタ映え」のような



表面的な魅力に依存せず、人との深い関わりを重視するスタイルが、外国人観光客にも深く響いていることを示している。

7. 南信州観光公社の未来

南信州観光公社は、今後の広域観光の未来を見据え、多角的な取組みを進めていく。

地域観光資源の再評価と旅行企画商品化、ツアー事業推進：自社募集ツアーの拡大と旅行会社とのタイアップ強化を並行して行い、地域資源の更なる掘り起こしと商品化を進めていく。

リニア時代を先取りしたプロジェクトの実施：リニア中央新幹線の飯田駅開業（時期は延期されているものの、いずれ確実に訪れる）を見据え、旅の目的提案、宿泊・飲食施設のレベルアップ、観光・宿泊・体験・ガイド・インバウンド対応などの人材育成、おもてなしの心の醸成、二次交通の課題解決に取り組んでいく。特に、リニア開業時には飯田が「世界に向けた長野県の玄関口」となるため、施設の質向上や人材育成は喫緊の課題と認識されている。

インバウンドの受け入れ拡大：地域の課題解決モデルを視察する研修ツアーや文化交流を目的としたツアーの受け入れを強化するほか、FIT（個人旅行者）対応のためのデジタルマーケティングを推進し、そして世界人口の大きな割合を占めるイスラム圏からの観光客に対応するためのハラル対応への意識醸成も重要課題としている。ハラル対応はまだ国内で事例が少ない中での挑戦であり、地域全体の意識改革と取組みが求められている。

南信州観光公社は、地域に根差した「ほんものの体験」を通じて、観光を地域振興の手段とし、多様な人々が南信州の魅力を深く味わえる「知的好奇心の旅」を提供し続けている。今後も南信州観光公社は地域の課題解決に積極的に取り組み、リニア時代を見据えた新たな取組みを積極的に展開していく方針である。

■質疑応答

■質問 1 「南信州こだわりの旅」の年間企画本数と人気のジャンルについて

●回答 1 年間では約 30～40 本のツアーを企画しており、将来的には 50 本（週に 1 本）を目指している。人気のジャンルとしては、以下の特徴がある。

歴史系のツアーは予想以上に人気が高い。たとえば、青崩峠トンネルの開通前ウォーキング企画では、募集人数 20 人に対して 40 人が応募し、追加企画が必要となるほどであった。また、農業用水路である竜西一貫水路を巡るツアーでは、20 人の募集に対し 50 人が集まった実績もある。

祭りや伝統文化に関するツアーは、安定した集客が見込める。

無名の人物であっても、地域の歴史上の人物に焦点を当てた企画は人気を得ることがある。

■質問 2 「南信州こだわりの旅」の価格設定はどのようになっているか

●回答 2 日帰りツアーで、飯田市内の移動に特化したもの（自家用車での集合場所までの交通費は別）の場合、1 人あたり 15,000 円から 18,000 円程度が目安となっている。この価格帯は、どのツアーもほぼ同様である。

■質問 3 インバウンド（訪日外国人観光客）の受け入れ拡大はどのように行われ、彼らの日本滞在中の一般的な行程はどのようなものか

●回答 3 受け入れの拡大は以下の経緯をたどっている。

拡大方法：当初は日中友好会館や日韓文化交流基金、日本台湾交流協会など、政府系の組織に営業をかけ、小規模な説明会から始めた。長野県からの依頼により、学習旅行の受け入れも行った。その後、中国系エージェントの個人的なネットワークを通じて直接の連絡が入り、「来週 20 人をお願いしたい」といった急な依頼が増加。支払いを前払いにするなどの条件を設けて

受け入れた結果、3 年目にはインバウンドの受け入れ数が急増した。

一般的な日本滞在行程：韓国や台湾からの観光客（短期間滞在）は、羽田空港に到着後に東京（浅草など）を観光し、富士山方面を經由して飯田へ立ち寄り、羽田へ戻るか関西方面へ向かうルートが多い。中国本土からの観光客（長期・豪華滞在）は、羽田空港に到着後、都内で数日過ごし、山梨（甲府周辺）や軽井沢へ移動。その後 3 日目か 4 日目頃に飯田に滞在し、地域交流を体験する。さらに、ジブリパークやユニバーサル・スタジオ・ジャパンを訪問し、関西国際空港から出国するという 8～9 日間の行程が一般的である。

■質問 4 国内の修学旅行とインバウンドの修学旅行では、価格設定や提供されるサービス・内容は異なるのか

●回答 4 価格設定および提供サービスには明確な違いがある。

インバウンドの修学旅行は、東京から入り関西へ抜ける周遊型ツアーの一部として飯田が組み込まれるケースが多く、滞在時間が短い。夕方に到着し翌朝に出発することが大半である。そのため、宿泊単価は国内修学旅行よりも 2 割～3 割程度高く設定されている（例：通常 9,000 円のところを 1 万円台に設定）。ただし、午後の早い時間に到着して体験活動に参加できる場合には、国内向けと同様の価格になることもある。

国内の修学旅行は滞在時間が長く、地元旅館や農家民泊に 2 泊するなど、余裕のある行程が組まれる。午前中に到着し、午後から農家で体験活動を行い、そのまま民泊に宿泊するなど、地域での滞在時間を重視し、より深い交流が目的となっている。

■質問 5 インバウンドの農家民泊では、毎回同じ農家が受け入れているのか。また、農家への支払い方法はどのようになっているか。

●回答 5 受け入れ農家の選定は、南信州には

約 100～110 軒の農家民泊の受け入れ農家が存在するが、インバウンド対応が可能なのは約 50 軒である。1 団体（約 40 人）を受け入れるには約 10 軒の農家が必要なため、毎回同じ農家を受け入れるわけではなく、団体ごとに異なる農家を受け入れる仕組みとなっている。年間 10 回インバウンド受け入れがあった場合、そのうち 3 回程度は同じ農家が担当する可能性があるというイメージである。

農家への支払いは、設定された宿泊料金から観光公社の手数料等を差し引いた後、約 70%が受け入れ農家に支払われる。

